


 書評

Emil Kraepelin 著, 影山任佐 訳 クレペリン回想録

小阪憲司

本書は、「近代精神医学の父」といわれるクレペリン自身の回想録であり、1976年にミュンヘンで開催されたクレペリン没後50周年記念式典の際にミュンヘン大学精神医学教室のヒッピウス教授やマックスプランク精神医学研究所のペータース教授ら編集者の提案にクレペリンの子孫が同意して1983年にSpringerから出版されたものを、影山氏が全訳したものである。

私は1977年に、クレペリンが開設したドイツ精神医学研究所の後身であるマックスプランク精神医学研究所に留学した。研究所はシュヴァービング地区のクレペリン通りにあり、玄関を入るとすぐクレペリンの胸像が目に入る。

この回想録は、青雲編、ドルパト大学教授時代、ハイデルベルク大学教授時代、ミュンヘン大学教授時代、第一次世界大戦とドイツ精神医学研究所の5章からなり、1926年に没する7年前、ミュンヘン大学定年退官の3年前の1919年までのことが記載されている。

1856年にベルリン北部で生まれてから1886年にドルパト大学精神科教授になるまでが、青雲編で描かれている。眼科医を志望したが、心理学への関心が強く精神科医になることを決心し、ライプツィヒ大学に入学し、ビュルツブルク大学でブント(実験心理学)に大きな影響を受けた。1878年にグッデン教授の指導でミュンヘン市精神病院で働き、その後ライプツィヒ大学精神科助手になったが、心理学教室のブント教授のもとで働いた。1883年に「精神医学提要」(教科書【精神医学】の初版)を出版し、教授資格取得後、ミュンヘンへ戻り精神科病院の医長となった。1886年にロシアのドルパト大学精神科教授に招かれた。ドルパトでは苦労もあったが、「教科書第2版」(1887)、「第3版」

(1889)を出版した。

1891年にハイデルベルク大学教授に招聘され、「教科書」第4版(1893)を出版した。実験心理学、司法精神医学、大脳局在論などに関心をもち、早発性痴呆、躁うつ病や進行麻痺の研究に力を注いだ。ニッスルやアルツハイマー、プロイラーや呉秀三などもいた。国からの干渉が多く大学病院問題で苦境に立たされ、苦慮したあげく、1903年にミュンヘン大学へ教授として移動した。精神科病棟を落成させ、研究年報の発刊、バイエルン精神医学会の開催、アルコール中毒治療院設立など多くの新しい試みを行った。1917年にはドイツ精神医学研究所を併設し、ニッスル、ブロードマン、ブラウト、リュウデンなどを招き、後にシュヴァービングに研究所を移し、臨床部門や心理学部門も創設した。クレペリンの業績の核心は臨床観察から発展した精神医学的疾患の分類体系であり、「精神医学教科書」(第1〜8巻)、また精神医学研究所の開設として集大成された。クレペリンは旅行好きでヨーロッパやアジア、アメリカなど驚くほど多くの旅行を行い、見聞を広めた。1915年にシベリア経由で日本訪問を予定したが、第一次世界大戦勃発のため計画を断念したという。この本の最後に、「研究の必要性が、われわれの歴史の中でこれほど明らかになったことは恐らくかつてなかったことで、その実現の手助けができるならば、これほど喜ばしいことはない」と締めくくっている。なお、この回想録によってクレペリンについて知られていない面を多く知ることができ、特に若い精神科医にぜひお勧めしたい。

(ほうゆう病院)

●A5 255頁 2006 定価5,250円(本体5,000円+税) 日本評論社